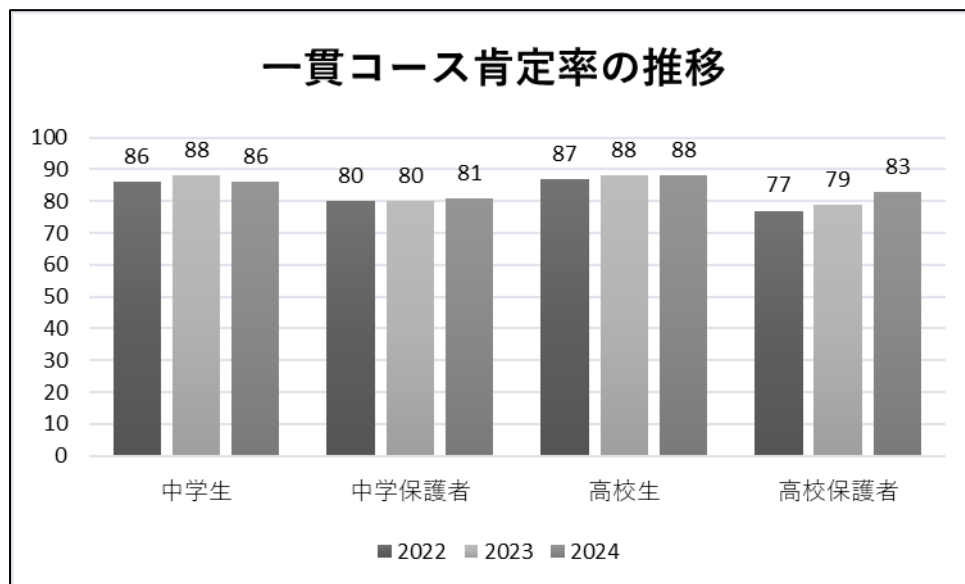


2024 年度中高一貫コース（中学校・高校）総括

1. 生徒・保護者の過去3年間（2022 年～2024 年）の全質問項目の肯定率（それぞれの質問に対してそう思う、ややそう思うと回答した割合）の平均（％）の推移（数字は左から 2022 年、2023 年、2024 年のデータ）

中 学 生：86・88・86 中学保護者：80・80・81

高 校 生：87・88・88 高校保護者：77・79・83



このような調査においては、肯定率 80%以上は高い評価であると判断する。

*2024 年度の肯定率は、2023 年に比べて大きく変わらないなか、高校保護者では上昇がみられた。

*中高一貫コースの生徒の肯定率は、これまでは中学の方が高校よりも高く、保護者についてはほぼ変わらない傾向であったが、本年度は生徒・保護者とも高校の方がわずかではあるが高くなった。

2. 中高一貫コース生徒の質問項目 1、5、7、8、19、21 の過去3年間（2022 年～2024 年）の肯定率（％）の推移（数字は左から 2022 年、2023 年、2024 年のデータ）

（1）「本校に入学して良かった」	中学生：94・96・93	高校生：89・94・94
（5）「授業内容の理解」	中学生：81・79・75	高校生：81・87・80
（7）「能力・個性に応じた適切な指導」	中学生：82・85・85	高校生：89・84・85
（8）「クラブ活動の満足度」	中学生：70・76・75	高校生：80・79・89
（19）「進路実現等に向けた学力向上」	中学生：89・90・88	高校生：89・87・90
（21）「学校行事の充実」	中学生：85・93・94	高校生：88・90・87

*質問項目（5）「授業内容の理解」の肯定率は、中学生・高校生ともに低下し、特に高校生は5ポイント以上と大きく低下している。教員は授業評価アンケートをもとに、さらなる授業改善に努めていくだけでなく、積極的に対面やオンラインでの授業研修に参加し、授業力の向上に努めていく必要がある。

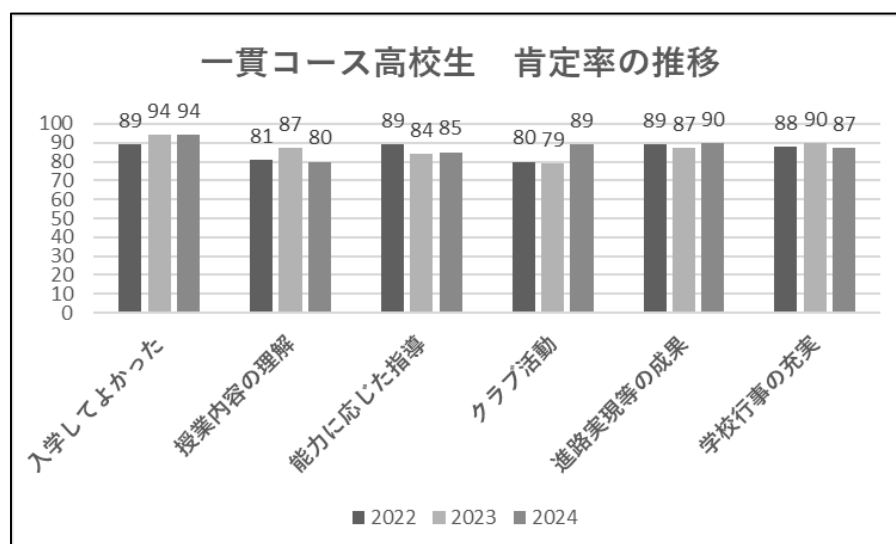
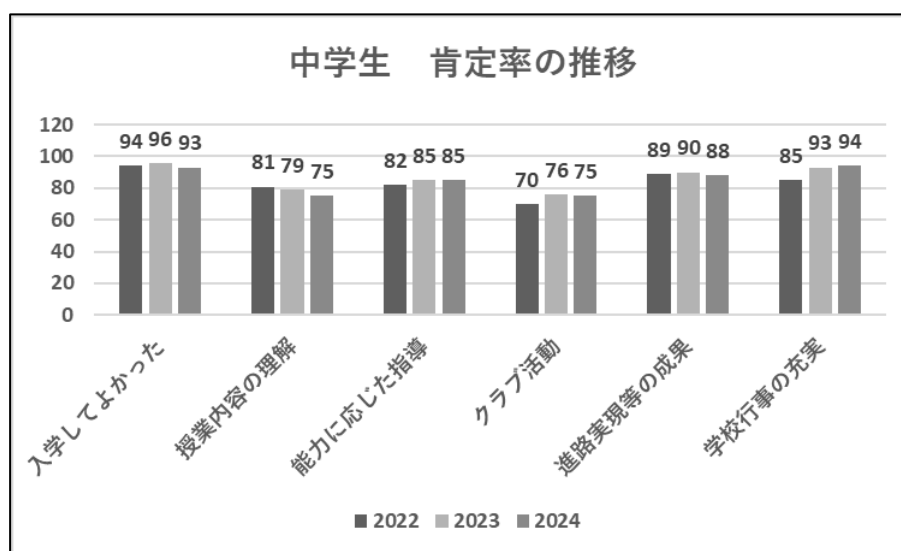
*質問項目（8）「クラブ活動の満足度」の肯定率は、昨年度、中学生が大幅に上昇したのに続き、本年は高校生が大きく上昇した。これまでの文化部だけでなく、高校生の運動部の中にも一貫生が中心となって活躍しているクラブ活動がみられるようになったことが、こうした数字に顕著に表れている。しかし中学生の肯定率は、他の項目と比べると決して高いとはいえない。今後は生徒の学習状況を鑑みながら、中学生の活動日の拡充についても検討していきたい。

*質問項目（19）「進路実現等に向けた学力向上」の肯定率は、中学生・高校生ともに90%近くと、非常に高い肯定率を維持できている。本年度は新しい業者による放課後学習会の導入のほか、平日や長期休暇中の補習・講習の強化に努め、これまで以上の進路結果を収めることができた。今後はより多くの生徒が自分の第一志望を実現できるよう、進路指導部主導のもとで、これまで以上に個々の学力に応じた補習・校内予備校・放課後学習会のあり方を構築していきたい。

*質問項目（21）「学校行事の充実」の肯定率は、中学生は高い肯定率を維持できているが、高校生については昨年よりわずかではあるが肯定率が低下した。体育祭・文化祭など生徒主体の学校行事の運営は定着したが、文化祭の内容については例年通りからの脱却が必要な時期にきているように思う。今後は生徒会とともに行事、なかでも文化祭の目的を明確にしながら、本校の独自性を残しながらも、文化部や日常の学習活動の発表の場としての位置づけをもたせた行事にしていきたい。

そのほか（3）「目標・目的意識をもった学校生活」については、中学生：85・高校生：92

（5）「課題（宿題）等の難易度が適当か」については、中学生：72・高校生：86 とともに顕著な差が生じている。中学生に対して、早期から目的意識の醸成を図るため、東大セミナーへの参加をうながすとともに、大学訪問などの行事を前倒しして実施するなどの取り組みを強化していきたい。また学年内の教科相互の連携を強化し、学習の定着を図ることができる課題の分量・難易度についても、引き続き検討していく必要がある。



3. 肯定率が70%以下だった質問項目（一貫コース保護者 今年度←昨年度）

質問項目（3）「目標・目的意識をもった学校生活」	中学保護者 69%←72%
（5）「授業内容の理解」	中学保護者 66%←66%
（8）「クラブ活動の満足度」	中学保護者 40%←44%

＊「目標・目的意識をもった学校生活」については、高校生 92%、中学生は 85%であるが、保護者の肯定率は高校保護者 75%に対して中学保護者 69%と大きな差がみられる。中学生の大部分が目的意識をもって学校生活を送っていることを保護者に実感してもらえるような進路関係の取り組みをいっそう強化する必要がある。また「授業内容の理解」については、高校生は 80%、中学生は 75%であるが、保護者の肯定率は中学生保護者が 66%と低い数字にとどまっている。保護者に生徒たちの成績の伸びが実感してもらえるよう、授業評価アンケートをもとにした授業の改善を図ることに加えて、学外評価委員の提言にもある「柔軟に外部人材の活用を積極的に」おこなうことで、生徒の学力向上に繋げる施策を考えていく必要がある。また「クラブ活動の満足度」については、中学生保護者の肯定率がさらに低下し、40%となっている。活動日にすべてのクラブが活動をおこなうことを徹底しながら、運動部はもちろん、文化部も大会・コンテストへの参加を目標に活動計画を立案するなど、生徒の意見も積極的に取り入れながら、クラブ活動の充実に努めたい。

4. 総括コメント

本年度の「生徒による授業評価アンケート」は、5教科の授業を中心に1学期末と2学期末に実施した。その結果をふまえて実施した「授業評価アンケートに対する教員の意識と実態についての調査」では、ほとんどの教員が「今回の授業評価アンケートの結果は、自らの授業改善に役立つと思う」と前向きに捉え、1回目から2回目にかけてアンケート数値が向上している教員も多くいた。新課程1年目の大学入試であったが、共通テストの出題傾向はこれまでと大きくは変わらなかったため、昨年まで増加傾向にあった「思考力の育成」よりも、「指導方法・指導技術など授業スキルの向上」を課題にあげた教員が最も多かった。難関大学への進学実績のよりいっそうの向上のためには、共通テストの指導はもちろん、個別学力試験に対応できる学力を養成することが不可欠である。その目的達成にむけて、「授業評価アンケート」をもとに教員が授業力向上に向けて自己研鑽に励むことはもちろん、さまざまなチャンネルを活用した研修体制を整備することで学力の三要素をバランスよく伸ばし、難関大合格にしっかり対応した授業の実現をめざしていきたい。

2024年度は、中高一貫コース6期生が大学入試に臨み、国公立大学には京都大学2名をはじめ、大阪大学2名・九州大学1名・防衛医科大学校1名など、難関大学や地元の兵庫県立大学3名を含む27名（準大学を含む）が合格した。また私立大学には、関西の難関私大とされる関関同立に11名、産近甲龍に24名が合格した。旧帝大を中心とした難関大学の合格実績は大きく向上したが、国公立大学の合格者数が準大学を含めると昨年から5名減少したことや、難関私立大学の合格者数も減少していることをふまえると、授業改善に向けた取り組みを強化するとともに、教育課程の見直しや進路指導体制の改革をいっそうすすめていく必要がある。学外評価委員からは、「合格者数の伸び悩みをみると、教員レベルの底上げが進んでいないこと、特に授業力が改善していないこと、そして、特定の教員集団のマnpワ-で国公立大を中心に実績を積み上げてきたが、そろそろ限界がきたのではないかと感じる。全てを自分たちの力でやるという考えは改めないといけないと思う」という提言をいただいている。次年度は、これまで国公立大学推薦プロジェクトなどを通じて蓄積されてきた総合型・学校推薦型で国公立大学に合格させるためのノウハウを生かしながら、授業改善とともに校内予備校・放課後学習会など外部人材を活用した補習・講習などのいっそうの充実を図ることで、一般入試に向けての学力向上をめざし、難関大学を中心とした合格者の大幅増加をめざしたい。

コース制導入4年目となった2025年度の中学入試の志願者は284名（昨年309名）と減少したが、本年度

は入学定員を超える 92 名が入学予定で、コース制導入後はじめて定員を確保することができた。今年の入試では本校を第一志望とする志願者を多く集めることができ、それが定員を超える入学者の確保につながった。その要因としては、英語入試を導入したことで、近隣の私立中学校を受験することができない第一志望者の発掘に成功したことや、オリジナル動画の作成や志願者のニーズにあった説明会の開催など、広報体制を強化したことが大きかったように思う。次年度も本校を第一志望とする志願者のさらなる増加をめざし、入試改革を進めるとともに、東洋ブランドをさらに高めることができるような広報活動を展開していきたい。

2025 年はコース制導入後、最初の学年が高校に進学し、これまで以上に個々に応じた指導をおこなう体制が整うことになる。今年度の「授業評価アンケート」・「学校評価アンケート」等の結果を謙虚に受け止め、日々の授業の充実と改善に努めながら、東洋大学附属姫路中学校・高等学校のさらなる進化と飛躍に向けて取り組んでいきたい。

5. 2025 年度に向けての課題

- (1) 中高一貫コースの中学・高校の教育課程を見直し、難関大学入試にいつそう対応できるだけの授業時間の確保を図る。

中学：中学校の学習内容を 2 年で終えて高校の教育課程にスムーズに接続できるよう教育課程を見直し、シラバスを再構築する。

高校：国公立大学のさらなる合格者数増加をめざし、教育課程を見直すとともに、進路指導部主導の取り組みを強化する。

- (2) 生徒の授業内容の理解を高めるよう、教員が自己研鑽できる機会を増やすとともに、教員の授業研修体制をよりいつそう整備し、難関大学合格者の増加につなげていく。
- (3) グローバル教育の充実に向けて、現在のプランを再検討するとともに、学内でのグローバル化をめざした取り組みを強化する。
- (4) 中学入試における生徒定員の確保を継続できるよう、入試改革をすすめるとともに、広報活動の一層の充実を図る。